殺戮のカタストロフ

ガン＝カタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
殺戮のカタストロフ

【Ｎコード】
Ｎ９３８０Ｓ

【作者名】
ガン＝カタ

【あらすじ】
誰もが持っている狂気　それはとても美しい。
夜に出歩く奇怪な妖怪、日常の中に潜む快楽殺人者、姿無き人食い絵画。全ての謎が、狂気が、たった１つの愉悦へと変貌する。狂気を刈り取る者『望月鈴音』が贈る伝奇ホラーファンタジー。

享楽思考（前書き）

人の持つ本能的な部分を書ければ、と思いながら執筆しました

ご意見ご感想お待ちしています

享楽思考

昔から私は何をやっても上手くいかなかった

真似もダメ　模倣もダメ
あ、でも両方同じことなのかな

何度も言うが私は何をやっても上手くいかなかった

スポーツも

勉強も

誰かとお話しすることだって

誰かが笑っている事が憎い

誰かが幸せな事が辛い

ならばいっそ、壊してしまえば良いのだろうか

この美しい満月の下ならば

私はきっと、何でも出来る筈だから

＊

某月某日、夏。
セミが自らの一生を賭してミンミンと鳴く頃の話。
私は水を求めて自らの家に向かっていた。
別に自動販売機で買えば良いじゃない、と思う方もこの中には居るだろう。だがＢｕｔ。
お金が無いと言うのは存在すら罪なのだ。

「望月ぃ、また金欠か？」

「う〝ぅ〝……岡持センパイ……ジュース奢って下さいッス」

「嫌だね。この前に貸した金を返してくれたら考えるよ」

「鬼！　悪魔！」

世間一般に見れば、鬼や悪魔の類は自分なのだろうか。
借りた金の事など知らず、存じずを通すクズな私。そんなクズな私を未だに見捨てないのは目の前におられる健康的で美的センスバリバリの岡持センパイ。
文武両道を絵に描いた様な完璧超人であり、そんな彼の周りには女の子がイッパイ――と言うのは少なからずの幻想であります。
元が捻くれた性格なので、表立って『モテる』と言うよりは裏でコソコソとファンが増えて行く隠れアイドルチックな人なのだ。
夏の日差しを浴び、小麦色に焼けた健康的な肌。
流石は陸上部のエース。こんな不健康を地で行く少女とは別で、その肉体に輝く筋肉は超美的で官能的であった。興味無いけど。

「それより、また面白い噂が広まったらしいぞ」
「また？　……うちの市ってそんな心霊スポットの名所でしたっけ？」
「知らんよ。まぁでも、面白い騒ぎになっている事は確かだ」
クシシ、と悪戯を思い付いた少年の様に笑った岡持センパイは携帯電話を取り出した。
黒の携帯。イッツ・シンプル。だが指紋の跡でちょっと減点。これだから黒は困る。
っと、そう言う話ではなかったか。
何やらセンパイのマイメニューから選んだ動画たちの中に目的の物があるらしい。
そう言う訳でゴニョゴニョと操作を始めたセンパイが、私に向けて携帯を向けた。
見ろ、と言う事ですか。
覗き込んだ画面の中。そこにはゴソゴソと蠢く黒い“何か”。
見た事も無いそれは、見た事のない場所で何かをしている様だった。
つぅかこの場所って何処かの学校ですか？　そうですか。こりゃ～音楽室だろうか。
これは何？　そう問うよりも早く、岡持センパイが口を開く。
曰、それは妖怪の様な幽霊
……ごめんなさい。私には幽霊と妖怪の区別が分かりません。
どっちも同じ様な物じゃなかろうか？
あ、でも妖怪って言われると実体を思い浮かべる。それに比べて幽霊と言えば半透明。それじゃあ実体があるか無いかの差なのだろうか。

「で、何ですかコレ」

「面白いだろ？」

「暗闇の中でゴソゴソと動く得体の知れない物を見せられて面白いとでも？」

常人では考えられない常識のセンスに思わずため息が漏れる。
流石は岡持センパイ。頭脳明晰は伊達じゃない。その脳に詰まっているのは常識ある人間では理解出来ない非常識の塊と言う事なのだろう。
実に恐ろしい事実である。
しかし――1番気になるのは何故この黒い物体が学校に現れたかと言う事だろう。
場所ならば他に腐る程あるだろうに。
それでもこの学校に現れた理由は何なのだろうか？
それを解明しなければ、この黒い物体に接近するのは危険だと本能が叫んでいた。
まぁ本能も何も、私の場合は危険な場所に勝手に自分の足が向かうと言う凄い性能と言うか才能を持ち合わせているのでそんな事は無駄ですが。

「望月鈴音（リンネ）、正式な依頼だぜ。この訳の分からない奴をとッ捕まえろ」

ポンポンと肩を叩くセンパイの目が幾分か険しい物に代わる。
そうかそうか、そんなに金を返して欲しいのか。金の亡者共の1人だったのか、貴方も。
くっそー、何処かに500円玉でも落ちちゃいないかな～。

ネコババしちゃうのになぁ～。
このまま毎日ジャンクフード生活を続けていれば身体が壊れそうで怖いのだ。
たまには温かいお味噌汁と炊き立ての白米が食べたい。出来れば焼き鮭も欲しい。
でもジャンクフードは嫌いじゃない。
偏った物、と言うのを案外嫌いになれない性分なのだ。
偏った栄養に偏ったカロリー、偏った食生活。見事に私の生活は偏っていると言う事か。
このままならば命の天秤も負の方向へと傾きかねない。
それは流石にご遠慮願いたかった。

「気は進みませんけど、このままだと生きるか死ぬかの瀬戸際なのでやります」

「素直なのは良い事だぞ、望月。素直だったお礼に――」

「ジュースですか！？」

「Ｎｏ。センパイからの激励を送ってやろう」

死ね、ムシ野郎。
一瞬だけでも期待してしまった私の淡い思いを返しやがれ。
気に障る笑い声を残しながら私へと背を向け家へと向かう岡持センパイの背中へ向けて、私は盛大に手を振りながら、“笑顔”で、表現する事すら躊躇われる様な罵倒を送った。

＊

望月鈴音は一人暮らしである。
とある安アパートなボロアパートにて少女が一人暮らしをしていると言うのは如何なのだろうか。でもまぁおじさんとおばさんからの承認は頂いているのだから問題は無いのだろう。第一、私自身がそんな事を気にしてはいないのだから。

夕飯であるジャンクフードを小さなテーブルの上に広げ、特にやる事も無いのでＴＶなど付けてみる。パッと映った先には見た事のある場所。
何やらそこで殺人事件なる物が起きたそうである。この情報社会で何と物騒な。
殺したい程に憎い相手が居るのであれば、証拠も残さず殺せば良かろうに。例えば死体をバリバリ食べてしまうとか。
そうすれば証拠も残らないのではなかろうか。
これを実行するには前提事態が間違っている気もするが、その辺りは割合させて頂こう。

『殺害されたのは○×□さん、３４歳。死因は首筋を鋭利な刃物で切り裂かれた事による失血死と思われており、犯人は依然として捕まってはいません。近隣の住民の方々はくれぐれも注意を――』

「……うげぇ」

食欲を削がれた為にため息など１つ。
元々重い雰囲気は性に合わないのだが、かと言って楽観的思考になれと言われてなる事など出来はしない。故にその差を埋め合わせる

為のため息なのだが、それが私の心を癒してくれる事など今の今までありはしなかった。
取り敢えず、携帯電話。
電話帳に登録された数少ない名前の内、目的の人物の名前を押すと即プッシュ。
岡持幸平（コウヘイ）。
あの超変わり者のセンパイには似合わない文字である。
“幸せ”を“平たく”与えるなどと言われた時、私は腹を抱えて笑い転げた記憶が未だに残っている始末だ。ありえないし、何よりも似合わない。

「あ、センパイですか？　やっちゃったみたいですよー、黒いの。え？　名前の調べがついた？　へぇへぇふんふん。ユリちゃんですか、はい。漢字？　如何でも良いですよ」

右手に携帯を持ちながら、左手でうちの近隣地区の在住者名簿を捲って行く。
あった、サカマネ　ユリ（♀）。
顔写真など1枚拝見……おっ、中々の上物ですな。こりゃ実に勿体無い。まさかこんなタイミングで殺しを勃発させるなんて思いもしなかったのですよ。
時刻は既に11時20分過ぎ。
乙女ならば眠りにつく時間ではあるが、生憎とジャンクフード塗れの私は乙女じゃない。
依頼を受けて手前、このサカマネ　ユリさんに会わねばならぬのです。
とは言っても相手は殺人者。
しかもその手には鋭利な刃物があると聞く。そんな相手に如何すれば良いと言うのか。

ジャンクフード塗れの不健康少女が勝てる筈も無い。
ならば出でよ、最終手段。

「センパイ、ご一緒に夜風を楽しみながら殺人現場に散歩など如何でしょう？　え、嫌だ？　えぇい臆病者が！　アンタに期待した私がバカでしたよ！」

プツ、プープープー。
虚しく響く耳元での電子音。
分かっていた事だからこそ、ショック自体はそこまで大きくは無いのが幸いだった。
これがもしもセンパイでなければ、その両目引き裂いて炉に入れて暖を取っていた処であろう。あ、うちに炉なんてありませんけどね。

稲穂市。
人口云万人の中途半端に都会な中途半端な場所が私の住まいである。
そして何故か名前が稲穂なのだ。ギャップが酷い、実に不愉快です。
そんな稲穂市にある、それなりに有名な高校こそがユリちゃんの通っている稲菱（イナビシ）高校。伝統と規律を重んじる、何処にでもある一般的な公立高校である。
そして私こと望月鈴音、大学生。
今も尚美貌と己の限界に挑戦している私が生計を立てる為に大学で行っている事業が、万屋――何でも屋の様な物――なのだが時たまに今回の様な危ない橋も渡らねばならないと言うのが非常に困る。
その辺りの識別は全て岡持センパイに任せているのだが、あの人も人間だ。ミスはある。
とは言え、この様な事件での報酬は実に払いが良いのも確かな事。
鉄板の上に乗っかったお肉様を食べる為には、無理をしてでも通らねばならぬ道だ。

お肉が食べたい。凄く。
たまの休み、乙女の天敵である油とカロリーの塊に突貫したくなる事もあるのだ。

「はぁ～……」

しかして、私も年頃の女の子。
こんな血の香りしかしない特別楽しくも無い人生などササッとフェードアウトして、新しい自分の人生基盤など見つけに行かねばならぬのでしょうか？
無理な気がするのだが。
恋なし、暇なし、自由なしのシーソー人生。神様など居ないと言うことか。

駅前で買ったジャンクフードを右腕に。
どうか面倒事に巻き込まれない様にと言う期待と願望を左腕に。
ワクワクドキドキの殺人現場への直進を始めるしかあるまい。
ガサゴソと取り出したのはハンバーガー、ジャンクフードの王様。
それを口に含みながら、私は致し方無いとばかりの溜息と共にボロアパートを後にした。

＊

メーデー、ポリス。マジで助けて。

「だって仕方がなかったから……私は悪くない、私は悪くない、私は悪くない、私は悪くない、私は悪くない――ッ！！」

「えっと、ＯＫ。落ち着こう。取り敢えずコーヒーでも飲まない？」

「何も良くない、何も解決しちゃいない！　世界はずっとこのままよ、貴方だってそのままなの！　そんなの悔しいでしょう！？　本当はこんな筈じゃなかったのに！」

女子高生。
艶やかな髪と、薄気味の悪い狂笑を携えた恐ろしい少女。
綺麗な制服に付いた血と肉片。
血とは言っても色は赤よりも黒に近い生々しい物である。世間様での名称は返り血。
で、血を出す程の大怪我をした相手は何処だ？
あぁあのＴＶで放映していた人かな。
なら――私の探し人は目の前にいる不思議ちゃんだと言う事なのだろう。
姓は確か、サカマネだかサルマネだか何とか。兎に角名前はユリなのだからそれで良い。
殺人現場を拝見しようと歩いて居た筈なのだが、いつの間にか殺人者と会ってしまったようだった。選択肢を間違えた覚えは無い、ならばこれが正解だと言うのだろうか？
ハッハッハ、自分に合掌。

うわっ、それにしてもユリちゃんの臭いは酷い……
年頃の女の子からは香る筈の無い硫黄の臭いと形容すれば良いのか、兎にも角にも臭い。
腐った卵でも投げ合ったのだろうか。それならばどれだけ平和的だろうか。

それを掃除させて、お風呂に入ってさようなら。それで終わり。
だが今回はそうはいかないのである。
だって人殺しだし。
だってイっちゃってるし。
でも殺人者の前に立っている私も結構間抜けなのだろう。何故逃げなかった。不健康此処に極まり、遂には足にもガタが来たと言う事なのだろうか。

「月夜は私の負を全部無くしてくれる！　だって月の光は裏の力ですもの！　太陽に照らされて何も出来なかった私にもやっと出来る事が見つけられた！　見て、私“綺麗に出来た”でしょ！？」

そう言って指差した方向には――見たくも無いのだが――首から上の無い死体が、２つ程転がっていた。首が無い、と言う事から察するに先ほどの１人目は首を叩き落とす事に失敗したと言う事なのだろう。
自分でも知らずの内に口元を覆っているのが分かる。
溢れ出す噴水の様な血液、転がっている２つの肉塊。本来ならば付いている筈の場所から遠ざかり、まるで身体に添えたオブジェの様に苦しみに染まった２つの顔が覗く。

あぁ、もう

ホント

ついてないね

“アンタ”

「ユリちゃん、もうダメだね。アウトだよ、アウト」

「え？　え？」

「三人も殺せたんだ、凄いね～。それで？　次は如何するのかな。もっと殺すの？」

「ね、ねぇ、何を、言って……え？　あ、あなた、だ…れ…？」

「野球のルールで3回アウトを取ったらチェンジなの。わかるかな？」

子供に諭す様に、分かり易く、丁寧に言葉を選ぶ。
目の前にいやがるユリちゃんは怖い物を見る様な目で此方を見つめているが、そんな事は私に関係のある事じゃない。
今は私が用のある相手は彼女の“罪”なのだから。

「やっちゃったね、やっちゃった。人を殺しちゃったね」

「ち、ちがう、私は人なんて殺しちゃいない！」

「えー、じゃあ“ソレ”何？」

「これ？　……ゴミよ。世界のゴミ、有り得ちゃいけないゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミ！　腐敗切除腐乱廃棄腐臭密閉不快なれば全て廃すべきゴミなのよ！！」

端正な顔が恐ろしいほど気味悪く歪む。
道行く人が見れば十中八九は間違いなく悪魔と言ってくれそうなその面を見て、私の愉悦が収まる処を知らない。何て素晴らしくぶっ壊れている人間だろうか。
あぁ素敵。
これだから人間って大好き。
ユリちゃん曰、ゴミとはこの世に巣食う悪逆を尽くすクズ同然の者達のこと。
それは日常、誰かに嫌われていたり、誰かに不快感を齎す者達。
今日ニュースで言っていた３４歳の被害者。あれは――私の通っていた高校の教師だ。
担当教科は数学。
毎日かなりの量の課題を生徒たちに強要する為に常日頃から生徒たちからあまり好かれてはいなかったが、まさかそんな基準で殺されるとは本人も思ってやいなかっただろう。無論私だって同じくである。
誰が想像するか。そんな下らない理由で人殺しが起きるなんて。

「ゴミかー」

「そ、そうよ！」

「ならさ――“貴方”も私のゴミだわ、ユリちゃん」

ニコリ、と狂気を超える狂気が辺りを敷き詰める。
笑っていた筈の悪魔が、此処に来て漸く自分の置かれた状況につい

て理解しちまった様だ。これだから困る。理解すれば暴れるだろう？
ほら、見た事か。
ユリちゃんは怯えた手付きで自分の獲物に――
って、何よ。鉈？　家庭的だけど随分と猟奇的な獲物ね。
その鉈と言う形状と漢字に今回の件のありとあらゆる狂気が混ざっ
てグチャグチャにミキサーされている様に感じるわ。
と言うか仕事しなさい、国家公務員。公僕でしょう、私の僕でしょ？
だったら相手の武器の形状くらい確り把握して欲しい。あれは鋭利
な刃物じゃない。
あれは――重量と腕力で対象を叩き切る凶器だ。

「ホント可愛いなー。そんな小さな抵抗もお姉さん可愛いから許し
ちゃいそう。あっ、でも痛いのは勘弁ね。死んじゃうから」

“死”
その単語を耳にして、ユリちゃんの表情が変わる。
殺せると分かったから。
今、自分の目の前にいる化け物も所詮は人間。殺せるのならば――
今まで通り殺せば良い。
大丈夫。さっきだって上手く出来た。
月もある。
だから、私は出来る。絶対に失敗はしない。今度だって綺麗に出来
る筈なのだ。

故にサカマネ　ユリは自らの手で自らの首を絞めている事を知らな
い。

「それじゃ、お姉さんと遊びましょうか」

望月鐘音が三日月よりも鋭利な微笑を見せた時。

サカマネ　ユリは自らの終わりを本能的に悟る事が出来た。

＊

右とか

左とか

上とか

下とか

そんな事も分からないほど、私はバラバラだった。
私を見下ろす様に見つめる先ほどのお姉さんは、その綺麗な手にニュルニュルと蠢く何かを持っている。
あぁ、私はそれを知っている。夢で見たもの。
それは私に、狂ってしまえと囁いた全ての元凶だから。悪い奴だから、覚えている。

「これはね、貴方の罪の心」

お姉さんが私に笑いかけてくれた。
さっきまでの怖い笑顔とは違う、優しくて暖かい笑顔。あぁ嬉しい、何故か凄く嬉しい。
だってさっきまであんなに怒っていたのに、今では笑いかけてくれ

るんだもの。
失敗しちゃったけど、怒られない事が凄く嬉しい。
お姉さんは私の頬を撫でながら、悪い奴を自分の後ろへと放り投げた。

パクリ

お姉さんの後ろから、悪い奴を噛み砕く音が聞こえる。

モシャモシャ

グチャグチャ

ガムガム

ゴックン

咀嚼するまでの僅かの時間。
上下左右も分からない私は何とかお姉さんの後ろへと視線を向ける事が出来た。
黒い物体。黒くて、大きな物体。
尻尾が見える。羽も見える。爪も見える。太くて大きな首も見える。
けど、顔が見えない。
顔だけが見えないのだ。

「まだ足りないってさ。貴方が“首”ぼっかり切り落とすから――首が欲しいって」

お姉さんの表情が消える。
ノロリ、ノロリと後ろに居た黒い何かも私の下へと向かって来る。

みんながみんな、私を見るの。
あそこに居る人は私が最初に殺した人。ごめんなさい、首を上手く斬れなくて。
あそこに居る人は私が2番目に殺した人。ごめんなさい、ネックレスを壊しちゃって。
あそこに居る人は私が3番目に殺した人。ごめんなさい、服を汚して。
みんながわたしをおこるの。
みんなが、わたしをせめるの。
ごめんなさい。
だから、ごめんなさい。

「じゃあ、バイバイしようね。ユリちゃん」

「バ…イ……バ、イ……？」

「あんな“ゴミ”とはバイバイしようよ。だってユリちゃんがあの人たちを“ゴミ”みたいに殺しちゃったんだから――ゴミは要らないでしょう」

ガブリ

首の無い怪物が、首のある1人目の首を噛み千切った。

グジュリ

首の無い怪物が、2人目の腹を食い破った。

ジャグリ

首の無い怪物が、３人目の腕を引きちぎった。

血が、血、血が、出ないけど、こわい、痛い、私の頭と、お腹と、
腕が……痛ぃ。
とても痛いの。
痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、
痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、
痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、
痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、
痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、
痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、
痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、
痛い、痛い――っ！！！！

「アゴボォゴォォォォォォォッ！？！？！！？！！？！！」

「可哀そうなユリちゃん」

痛みに震える私を、お姉さんは楽しそうに見つめていた。
如何して。
私苦しくて、悲しくて、痛いのに。如何してそんなに楽しそうでいられるの？
ねぇお姉さん。
貴方は、如何して……そんなに壊れているの？

「ユ～リちゃん」

「ぁ……ぁ～……」

お姉さんの綺麗な手の中に包まれていた何かが、私の目に映る。

ドクドクと脈を打つそれは、図鑑やテレビでしか見た事の無い物だった。私たちの体の中にあるけど、決して目に触れないそれの名前は――心臓って言うんだ。

「さよなら」

はい、さようなら。
さようなら、お姉さん。

バクン

首なしの怪物が、“私”の心臓を食べちゃった。

＊

「あー、センパイ。お仕事終わりましたよー。え！？　ご飯ご馳走する！？　あ、まって、だって夜じゃ何処のお店も開いて――うぇっ！　明日の夜ですか！　わ、私ステーキとか食べますよ、２人前とか！　ＯＫ！？　センパイ大好き、これからも一生付いて行きます！」

深夜の公園からの帰り道。
取り敢えず、仕事の終了を伝える為にセンパイに電話をしたら思いがけない返答をくれた。如何やら明日の夕食を奢ってくれると言う事らしいのだ。

ビバ、青春。
持つべき物は訳の分からない狂気と羽振りの良いセンパイだぜ。
ビクンビクンと公園の真ん中で痙攣を続けるユリちゃんを捨て置き、私は上機嫌で自らの家路を急いだ。
これ以上、殺人者――からランクアップして殺人鬼には関わりたく無い。

でも相変わらず仕事を終えた後に気分が良いのは残念な処である。
人間の体はやはり都合の良い様には出来ていないのか。
あんなグロテスクでトラウマ残して行く様な猟奇殺人の現場を目にした今でも、私のお腹は平然と空腹を訴えるのでした。最悪だろ、戻してみせるぞ。

そうだ、コンビニに行こう。
仕事の後と言えば貴方しかいない。２４時間フルの貴方には私は感謝してもし足りないわ。
今日もいつも通り、安物のおにぎりとビールを買って行く事にしようか。
それが今日最後の晩餐になる訳だ。
うわー、超不健康だね。流石はジャンクフード・クイーンだ。

あの軽やかな入店音を、今はとても恋しく感じた。

享楽思考（後書き）

取り敢えず、読者様の反応を見てみたいと思います
お手数ですが感想へのご意見お待ちしています

まだまだ私自身サスペンスやホラーは疎い部分もあるので、
手探りで初めていきたいと思っています

架空眼球

／／架空眼球

苦しい

助けて

嫌だ

再三の忠告を無視して、それは何度も僕に語り掛けた。
喋るなと言った筈なのに。如何して言う事を聞いてくれないのだろうか。
馬鹿なのだろう。
阿呆なのだろう。
これだから“人間”はダメだ。嫌い、嫌い、大嫌い。
そんな事よりもお祈りをしよう。
神様に祈ろう。今日も世界はクソ溜めの様に意地汚く僕の心を満たしてくれる様に、と。

苦しい

助けて

嫌だ

出かけよう、出かけないと。

僕はキチンと良い子なんだから。今日だって僕は僕の為に僕だけの世界の為に。
頑張ろう。頑張るね。

＊

「キチンと復習はしておけ。以上」

気だるい授業は終わりを迎え、私こと望月鈴音にも漸く自由の時間が訪れる事になった。
時刻は正午。
ちょうどお腹も空く頃合いである。何を食べようかなー、なんて頭の中でボーっと妄想ばりの空想を繰り広げていた。ふとそんな時、我が机の上にドンッと大きなお弁当箱が置かれていたのであります。
ギャッ！！　などと乙女に有るまじき絶叫を発した自分が愚かしい。
しかし、あ、危ねぇ……殆どの生徒が購買に向かっていてくれて助かったぜ。

「どうした、リン！　今日も元気ないぜ？」

「何よぉ、桜子……アンタはいつも元気バリバリ絶好調過ぎるのよ……もっと夜の世界を謳歌しなさい。深夜枠にやるアニメとか、ゲームとか」

机の上で空想に耽っていた私に話しかけた人物は、私の数少ない友

人の1人とも言える『丹波桜子』と言う女の子だった。
今風の金とも茶とも言い辛い色に髪を染め、化粧もバッチリ決めてクラスの男共を誘惑するマドンナみたいな存在。
しかして、その実態は元気バリバリの格闘娘。好きな事はK－1とかボクシングの試合を鑑賞する事らしい。曰、マッチョな男の人の汗が飛び散る場所が好きらしい。
私とはあまりに正反対な人物だった。
だって、ホラ。私って三次元より二次元推奨派だし。でも映像よりは活字が好き。

「電気代がかかるからってゲームもアニメも禁止したお前の言葉かよ、それ。えぇ？　このヒキオタニートさん。っと、ニートじゃないね……働いてるし」

「そうよ、アンタと違って齧る親のスネが無いの。羨ましいわね、弁当寄越しなさい」

「媚びり方があるだろ？　ホラ、あたしを満足させてみなって」

「お断り。私には女同士で絡む趣味趣向は無いから」

冷てぇなー、と口で零しながらも大きな弁当箱――と言うか重箱を机の上に広げる。
何と言うか……重箱の中は虹色に輝いていた。凄い、お節みたい。
桜子と結婚した男の人は毎日こんなお弁当が持たされるって訳なのね。羨ましい。
あ、でも、桜子ってもしかしなくてもレズビアン？
いや……触れるべきではない部分か。人の性癖は人それぞれ、十人十色って事で1つ。

「そう言えば仕事はどう？　いきなり万屋なんて開いてビックリしたけど、うちの大学内じゃ評判も結構良いみたいじゃない。値段も良心的らしいし」

「ボチボチよ。でもまぁ強いて言えば、労働と供給のバランスが不釣り合いかも」

労働に見合った金銭が欲しいとは世の中で勤しむサラリーの弁。
こっちは２４時間依頼主の為に命と自由を削っているのだ。ケチケチしないで金をくれ。
具体的には諭吉さんを1枚。
逆に言えば、どんな仕事だって諭吉さんを見せられればやるって事よね。
安いわ、私の自由と命。所詮は命の価値なんてこの程度なのか。

だし巻き卵を食べながらふと思案。
やはり世の中は理不尽だ。如何して私が苦労して、目の前に居るザ・ゴージャス麗人が苦労しないのだろうか。やっぱりお金？　お金って大事なの？　世は全て金なのか。
くそっ、宝くじで3億当ててやる。
実は密かに宝くじを十口程買っているのだ。当たる、絶対に当たる。何せ今回はわざわざ遠出までして当たり易いと評判の宝くじ売り場に行ったのだ。
これで当たらなければ捻くれる。
でも……どうせ当たらないわ。知っているもの。私に金運が無いことくらい。
死ぬまで札束を拝むことなんて無いんだ。
所詮私も口座に入って行くバラのお金が0を刻んで行く事に喜びを感じる平々凡々なサラリー人生を送って死ぬしかないのだ。嫌だなー、凄く悔しい。

「ところでリン。『眼鏡強盗』って知ってる？」

「世の流行には疎いもので。で？　何それ、眼鏡を盗む強盗？　規模小さいね」

だし巻き卵の次は揚げ出し豆腐。そう思い箸を伸ばしていた私の動きが、桜子の言葉で止まる。世間様で騒がれている『眼鏡強盗』なる物ですが、私は全く知りゃしない。

嘗めるなよ、この情報社会から抜け落ちた様な節約生活を。

ＴＶは一日一時間。小学生だって真っ青だ。

唯一消費して良い電力と言えば、携帯の充電位の物である。今時の大学生の乙女からは考えられない生活だろう。

しかし、『眼鏡強盗』と言うのだから眼鏡が絡んでいる事件なのか？

眼鏡を盗むだけじゃ単なる変質者なので、眼鏡を着けている人からお金を奪うとか。

「眼鏡強盗って言うのは、文字通り眼鏡を盗む強盗なんだけど……盗むのは眼鏡だけじゃないんだ」

そこで息を吐いて、桜子は鞄から取り出した水筒から自前のハーブティーを注ぐ。

良い香りが少し離れた此方まで香って来る。それを飲んだ桜子はどうやら喉を潤し、これから喋る本題へと向けて力を溜めているのだろう。

あっ、補足ではあるのだが、あのハーブティーは冗談抜きで美味しい。私が桜子と友達でいるのは多分だがあのハーブティーが理由の８割を占めている様な気さえ起きる。

「この眼鏡強盗はね、眼鏡を着けた相手の眼も奪うらしくって……」

「へ？　眼って、私たちが物を見る為に使う眼？　Ｅｙｅｓ？」

「そうらしいよ」

あー、うわー、マジで猟奇的。
桜子の話を聞く限りだと、何でもこの『眼鏡強盗』が始まったのは最近の事らしい。
最初の被害者は２０歳代の女性。
人通りの少ない家への帰り道を後ろから襲われ、眼鏡と眼を奪われたそうな。
次いで３０歳代の男性。
続いて１０代の少女。
そして近頃起きた２０代――と言うか、うちの大学の生徒である男子生徒。
再三再四帰宅時は注意する様にと言っていた筈だったらしいのだが、今回は運悪くうちの生徒が流行りである『眼鏡強盗』にやられちまったらしいのだ。南無三。

「そうそう、此処からはアンタにも関わる事だけどね」

「ほうほう」

「うちのセンパイからの言伝。依頼したいって」

「うん？　依頼って、万屋に？」

「そうそう」

「何を？」

「『眼鏡強盗』事件解決を」

……

……

……

……

……

おい、桜子ちゃん。

普通ね、そう言う事はただの女子大生に頼むことじゃないでしょう。

常識を知ってくれ。頼むから。

警察を呼んでくれ。誰でも良いから。

＊

放課後。夕空に照らされた大学内の敷地にある物置にそいつは居た。

黒のショートヘア、落ち着いた色合いの服装に身を包んだ女性。

オレよりも学年が１つ下である望月鈴音と呼ばれる生徒。

見た目は平々凡々。

噂で聞く限り、成績は上位らしいがそれも所詮は風評である。オレの眼と耳、そして身体で感じなければ信じられる内容では決してない。

だが、それでも彼女の持つ瞳の色だけは忘れたくとも忘れられなかった。

真っ赤。充血しているとかでは無く、純粋に赤い。病的なまでに真紅の瞳。
2つの赤と紅がオレを見つめる。
ゾクリと背筋に寒気が走る。一瞬だが目の前に居る存在が人では無い様に感じられた。

「お前が……望月鈴音、か？」

「はい。鈴に音と書いて『リンネ』です。覚え易いでしょう？」

クスクスと笑って、手元にある書類に目を通す。
それは何だ？
オレがそう問うよりも早く、望月はその書類の中身をスラスラと読み出し始めた。

岡持幸平、3年
陸上競技部のエース
両親は離婚し、現在は母親と妹との3人暮らし
家計は裕福なのでバイトはせず、今のところはスポーツに打ち込んでいる
成績は常に上位
他生徒からの人望もあり、クラスの中心的人物である

望月の口から語られた内容に驚きはするが、別段驚愕すべき程の内容と言う訳ではない。依頼主（クライアント）の事を事前に調べるなど至極当然の事ではないか。それを真っ当に行えたと言う事は、まぁ望月鈴音を評価するべく材料にはなったが。
それを心得ているのか、望月は特別気にする事も無くオレに席へ座る様に促した。

少し湿っぽい部屋に置かれた埃に塗れた机。
それを真ん中に置いて対談するオレと望月。無論あちらは書類にばかり目をやっていて、此方を見てはいない。それで良いのか、客への対応。

「えっと、それで……眼鏡強盗でしたっけ。何故その事を私に？」

「今回被害に合った者がオレのクラスの者でね。このままだと寝覚めが悪いのでお前に頼む事にしたと言う訳だ。此処は万屋で、そう言った類にも流通するのだろう？」

「そこは常識的に考えて下さい。誰が好き好んで犯罪者逮捕に貢献しなけりゃ――」

「１０万だ。１０万払う」

「この下僕に何なりと命じて下さい、岡持センパイ」

望月鈴音は金に弱い、か。
密かに丹波くんからリークしていた情報はどうやら嘘では無い様だ。成程、如実に人間の卑しい欲望と言う部分を表している様な女である。利用価値もそれなりにあるのだろう。
何よりも下積みとは言え、実績がある。
最早何度も事件が起きていると言う時点で警察など宛になりはしない。ならば自らの足と手、そして眼で事の真相を確かめる以外に方法などありはしないのだ。

「えぇっと……じゃあ調査に入るので、取り敢えず被害に合ったクラスメイトさんのお名前を伺っても宜しいですか？」

「あぁ、佐上だ。佐上健。同じ陸上部でね」

手元の引き出しからルーズリーフらしい紙を取り出した望月が、佐上の事を書き留める。

『・佐上健：岡持幸平と同じクラス　陸上部　現在では最後の被害者』

見ていてあまり気分の良い物では無い。

佐上とは親密だったとは言い難い関係ではあったが、そうだったとしても同じクラスメイトの被害を機械的に処理されていると言うのは喜ばしい事実ではなかった。

「佐上さんが被害に合ったのは何時頃なのか、見当は付きますか？」

「何時頃か……活動の終わった後だからな……精々が8時過ぎ、と言った所だろう」

佐上の欄に新しく記入される事柄。

『8時過ぎに被害に合う』と言う単語を見て、如何にも居た堪れない気分に襲われた。

この女は何も感じないのだろうか？　いや、感じないからこそこの様な仕事が出来るのだろう。冷徹にして冷血、無関心を決め込む破綻者の様な女である。

「岡持センパイ、私はね。警察じゃありません」

ふとした時、望月は思い出した様に手を止めて此方へと視線を向けていた。表情は滑らかでいて凝固とでも言えば良いのか。堅苦しい中に映る僅かな微笑。見ていて、自分が蛇に見つめられている蛙か何かと勘違いしてしまいそうな恐怖。

値踏みされる様な鋭くいて嘗め回す様な視線。オレはそれを心から

不愉快に思う。
いや、思う事が出来たのだ。
此処でこの女に反抗しなければ、多分だがオレは一生この女に敵わないと理解したからこその反抗。腕を組み、自分の方がより立場が上なのだと示す様に足を組む。

「続けろ」

「はいはい。えぇっとですね～、私は警察じゃ無いので犯人を無傷で捕まえるなんて事は出来ないかも知れないって事です」

「そんな事か……多少の怪我ならば問題は無い。寧ろ、死ななければ良いさ」

望月の漏らす案外人間的な言葉に一先ず安心する。
良かった、やはりこの女も所詮はオレと同じく少し変質的な人げ――

「良かった。なら“壊しちゃいます”ね」

撤回。
前言撤回。
全て撤回。
今この女は壊すと言った。
確かに望月鈴音は今、壊すと言ったのだ。
物を壊す如く、この女は人を壊すと言ってのけた。何故そんな事が口から出るのだ？
いや、違う。オレが聞きたいのはそこでは無い。
お前は――“何をするつもりなのだ？”

「夜８時過ぎ……眼鏡を掛けた人が襲われる……男女順で来ている

から、次は女かな」

クスクスと、可笑しそうに笑う望月を見てオレの身体からは震えが止まらない。

妖艶と言えば良いのか。

それとも奇怪と表せば良いのか。

それよりもピッタリな言葉を当て嵌めるとすれば……そう、この女は狂気に溺れている。

「さて――万屋のお仕事開始、ですね」

ニコリと笑う悪魔。

狂気に満ちた凶器の様なキラースマイル。オレはそんな彼女に興味津々。

悔しくも、その笑顔に心を奪われてしまった訳だ。

危険だと分かっていてもオレは最早この女の事を知らなければ満足は出来ないだろう。

人間の欲求、オレの場合は無限に沸き続ける好奇心がまさにそれだ。

知りたいと思った。初めて誰かの事をもっと知りたいと思えた。

素晴らしい、望月鈴音。

お前はオレを狂わせる最高級の麻薬になる素質がある。

＊

私の考えた作戦は超簡単。

眼鏡を掛けた私が夜道を歩き、襲い掛かって来た眼鏡強盗をブッ飛ばして終了。
１０万円を懐に、犯人を檻にブチ込んでグッバイと言う訳である。
え？　もう少し探偵みたいに捻りを入れろ？　冗談じゃ無い、面倒は嫌いなのであります。

しかし此処に来ても未だに謎なのは、犯人が如何なる方法で被害者達から目を奪い取ったかと言う事だ。鋭利な刃物で奪い取ろうにも、岡持センパイ曰く被害者全員共通で際立つ外傷は何も無いと言う。
それでは何故、如何して、どうやって。
その部分は結局、分からないまま犯人と対決するしか無いと言う事だ。
大丈夫。
いざと言う時には、『とっても怖い鬼さん』が悪い犯罪者を倒してくれる。主に拳で銃弾、それと少しの刃物とかカッターとか頗る《すこぶる》見ていて気分を害する方法で。
最早時間的猶予も、金銭的猶予も無い私には突貫と言う選択肢しか選べないのだ。
様子を見る？
張り込み？
冗談じゃ無い、その２つには金が掛かる。
経費も自分持ちと言う呆れるばかりの良スペックを誇る我が万屋が、犯人と自分の保身を考えて行動出来る訳がないだろう。出来るのは精々が事後ケア程度。しかも無銭だ。
あぁ嫌だ。如何して私が不幸の真ん中で笑顔を振り撒きながら歩かねばならないのか。
人の幸せが憎い。具体的に言えば今日私の家の近くに構えている焼肉屋に足を運んだ全ての家庭・カップル・団体が憎い。私を見習え。
今から犯罪者とガチバトルだ。

――時刻は8時に差し掛かる。
電灯の光のみが頼りの人気の無い路地。そこで犯罪者を待つ華の大学生こと私、望月ちゃん。今日も今日とて生活費を稼ぐ為に綱渡りの様な人生を送らねばならないのだ。
あぁ憂鬱。
いっその事、幽霊になりたい。それで毎日毎時三途の川で泳いでやる。
三途の川を渡る為の六銭？　そんな物は必要ない。相手が神だろうが何だろうが、私が慈善事業の如く払ってやる金など一銭も無いと知るべきである。
と言いますか、その前に今の私が持つ唯一の肉親があの世に渡る事を許さないだろう。
きっと世界中の皆を虜にしてしまう様な笑顔を浮かべ、私の肩の肉を抉るが如く掴み上げて言うんだ。『お前が死ぬ事を誰が許可した？』みたいな事を当然の様に。
私の一番の不幸って、あんな破綻者を肉親に持った事じゃなかろうか。

「……余裕あるなぁ」

やはり春先。
薄着とは言え、まだそれ程までの肌寒さを感じる事は無い。ビバ春。
電気代や服代を使う事が無い辺りは四季の中で一番良い季節である。
ただし秋、テメェはダメだ。
体重と反比例する財布の中身を見せつけられて、正常で居られる精神の強さは私には有りはしない。あったとしてもそれを見せ付けてやる事だけは無いけれども。
犯人を誘き寄せる為の眼鏡を指で押し上げ、ベンチに腰を掛けてみたりする。

今回の件。
犯人は何の目的があるのかは知らないが、眼鏡を掛けた相手を襲って眼を奪うらしい。
現に佐上健と言う3年の先輩は眼を抉られてしまったと言う事だ。
此処まで来れば警察も血眼になって捜している様だが、証拠処か痕跡すら見つけられない始末らしい。囮捜査でもすれば楽だろうにそれをしないのは度胸が無いから？
それとも純粋に、道徳やら色々と口煩い今の世の中の世渡り辛さを現しているのか。
どちらにせよ――

「良い夜ですね、お嬢さん」

「あら、本当。無駄足で終わらなくて安心ね」

犯人を捕まえるのは私以外の何者でも無いのだ。
黒コートを着込んだ、痩せ型の男。深く被った帽子からは表情を覗く事は出来ないが、声音の調子からしても愉快そうである事は明白だった。
獲物を見つけたから嬉しいって訳か。上等だ、この変態野朗が。

「では――お嬢さん、眼鏡を拝借させて頂いても宜しいですか？」

「嫌よ。ただでさえ空っぽに近い財布で買った眼鏡なのに、アンタに渡すかっての」

私の答えに、男は――楽しそうに笑った。
今までは獲物が抵抗する事が無かったからだろう。だからこうして抵抗する獲物を見つけて喜んでいるのだ。それは少なからずともの慢心を孕んでいるのか、それとも絶対的な自信を持ち得ているから

なのか。
どちらにせよ、面倒な事に変わりは無いらしい。
「お嬢さん、お嬢さん！　いやはやまさか抵抗されるとは思いもしませんでした！　失礼ですがお名前を伺っても宜しいでしょうか？　貴方のお名前は”覚える”に値する！！」
自分の力を誇示する様に、来島は両腕を盛大に広げた。
随分と気まで狂い始めている様だ。突如として始めてしまった猟奇行為に陶酔して身も心も、何よりも常識と言う抑えを護る為の”理性”が崩壊している。
これだから猟奇好きは嫌いだ。
頭の天辺から爪先まで普通の人間では予測し得ない物ばかりで、常識を打ち破る。
人間が手っ取り早く限界を突破したいのならば狂っちまえば良いと証明する代表的な人種が、猟奇事件を起こす人種だと私は勝手に予想する。
まぁだから何と言う訳は無い。
今の状況から省みれば、寧ろそれは此方に掛かる重荷でしか無い。
普通じゃ無いから普通は通用しない。マジで面倒な相手である。
「……失礼を承知しているなら、自分から名乗りなさい。変態」
「ハハッ、いやいやいやいや！　これはこれは失礼……私は来島要（クルシマヨウ）平（ヘイ）と申します！　今世間で騒がれている『眼鏡強盗』で御座います！！」
恭しく一礼をする来島の胡散臭い微笑みを見て、私は分かり易い嫌悪行動を起こした。
分かり易く言えば、舌打ち。

チッチッチッ。鳥かよ、私はよぉ。

「で？　眼鏡強盗さん。貴方の目的は何？」

「目的？　目的で御座いますか……そうですね、強いて言えば『救済』でしょう」

……は？

嘘でしょ。

止めてよ、マジで。猟奇で尚且つ宗教狂いとか――最悪のパターンだ。

アレ、何て映画だったっけ。

脳ミソ食べちゃう頭のイカレタ男の話。リアルに居て欲しいとは思わない人種Ｎｏ．１。

それが目の前に居ると言う現状が信じ難い。

夢なら覚めて下さい、お願いします。あぁでも……１０万は夢じゃ無い事を祈る。

イカレタ男は一人でゲラゲラと喚く、騒ぐ。

曰く、この行いは神が自分に与えた使命なのだ云々。

曰く、この行いを行う事で偽と真を入れ替える事が出来る云々。

曰く、曰く、曰く、曰く。

最早全てはｅｔｃ、だ。

「あぁ過程とか原因とか如何でも良いから、取り敢えず方法を教えて。どうやって外傷を与えないで人の眼を奪い取って居るの？」

「はて？　私はただ、神に言われた通りにしているだけですが……」

ならサッサと神様の言葉を私に分かる様に翻訳しろよ。

と言った処で、この手の輩が理解出来るとは到底思えない。もうこ

うなれば実力行使で黙らせた方が手っ取り早くないだろうか？
別に壮絶な力があるとか、そんな事は無い訳だし。
だったらゴミはゴミ箱へシュートするべきでしょう。ボッシュート。

「あぁもう面倒臭い。私の欲と利益の為の礎となってね、気狂い」

パチン。
指を鳴らせば、そこからは私の領域であり私の本分である私の世界。
私が全てであり、私が王であり、私が神である絶対世界。
公園のベンチが消える。
辺りに生えていた木々が消える。
時計が消える。
人の反応が消える。
何もかもが、無へと消えて行く。
残されたのは2人だけ。私こと望月鈴音と来島要平のみである。では、一切合財の躊躇無くお仕事の最終段階を始める事にしよう。
ギャーギャー喚いても通じないのならば、サッサと食い殺すに限るのだ。

＊

「おぉ神よ、神よ！　これは一体如何言う事なのでしょうか、これは……！」
既に身体の半分程を怪物に飲まれた来島が、恐れを抱いた叫びを木

霊させる。
何ともまぁ、自分が被害者になれば一気に恐れ戦く訳か。
都合の良い奴が。そのまま苦しみと痛みと踊(ダンス)って後悔しやがるが良いさ。

「カ、カミ、よ、こ、これ、これこれこれこれこれぇぇぇぇぇっ！！　良いなぁっ、コレぇっ！　凄いよ美しいよ完璧だよ完璧過ぎて最早鳥肌物だよ！！　何でぇ、私はぁっ！」

気狂いは普通の類では無いですよね、サーセン。
ポリポリと頭を掻きながら、取り敢えず来島の話に耳を傾ける。あぁいや、少しでも罪悪感とか後悔があるなら一瞬で終わらせようと言う優しい慈悲の心ですよ。
だって、こんな満場一致で気色悪いと言われそうな空間に居たくは決して無い。
残念ながら私も所詮は平凡な小市民。
中身が化物だろうが何だろうが、根は小物な小娘な訳であります。
つぅ訳で耳を傾けちまった訳なのだが、そこで来島はゴボゴボと何やら訳の分からない独り言を漏らすばかりでしたとさ。
ダメだ。聞き取れもしない。

「取り敢えず1つだけ聞くから。アンタに後悔はある？」

私の言葉を聞いて、そして理解して、来島は空ろに笑った。
まるで此方を虚仮にする様な笑み。それを、私はただ無機質に見返してやる。

「な〝――――い」

「あっそ。なら消えなさいね」

処刑の合図。
それを待っていましたとばかりに、化物が来島の首から上をパクリと飲み込んだ。
やはりコイツの眼に対する欲求は並々ならぬ物だったのだろう。ならば、残念ながら化物にとってのそれは極上の餌でしか無い。
来島定食の出来上がり、と言う事ですか。気持ち悪い。

ムシャムシャ

バクバク

ガリガリ

……ゴリ

ゴリ？
普通なら聞こえないでしょう、そんな音。
化物の肩口から来島の頭部を覗けば音の招待は直ぐに理解出来た。
成る程、『義眼』だ。
と言う事は来島の犯行の原因も分かるのでは無いか？
この男は眼鏡で視力を矯正出来る者たちが憎かったとかそんな理屈。
それで、眼鏡を付けた奴らを襲って眼を奪う。それでお前たちも自分と同じ気分を味わえ的な介錯。

……違う。

もっと猟奇的で、普通じゃ考えない様な事を考えるべきだ。
来島は救済と言った。
では何を救済するのか？

救済する相手とは、誰なのだろうか？
救済――自らを神の御使いの如く言ってのけた気狂いの男の狂言として捨て置くには、あまりにも独特でいて毒々しい雰囲気を持っている。
来島要平……もう少しだけ調べてみる必要があるみたいね。

「その前に警察よね。善良なる一般市民が犯罪者を確保しましたよーっと」

善は急げとばかりに１１０番通報。
勿論使う携帯は私の物ではありません。来島　ズ　ケータイであります。
あー、もしもし？　公園に眼鏡強盗が倒れていますよ、捕まえて下さいね。グッバイ。
こんな感じで棄て台詞を残し、来島の携帯は綺麗にポケットへ突っ込みそのまま帰宅。
あぁ楽しみだ。
あともう少し頑張ればジャンクフードからランクアップして、ファミレスでハンバーグとか頼めちゃいそうで嬉しいですな！

＊

「で？　キチンと来島の事は調べ尽くしただろうな」
「勿論。来島要平、右目が義眼の彼が眼鏡を掛けた相手を襲うのに

は理由がありました。それはですねぇ、彼は眼が見える様になりたかっただけなんです」

「……なに？」

依頼を受けた時と同じく、物置を改造した万屋で岡持センパイとの対談をする。
が、今回はミッション・コンプリートを伝えに来たのであります。
来島要平が捕まって既に3日。
私は必死に、その後ろに潜む事件の真相をこの3日間で追い求めていたのだ。
全ては１０万の為。全てはハンバーグの為。

「盲目的って言うか、独特な発想と言うか……凄いですよね。自分に合う目玉を探していたみたいですよ」

そこで懐から取り出すのは、あの日来島から強奪した携帯電話。
それを操作し、ブックマークを表示する。
綺麗に小分けされているそれは、来島要平の人間性を忠実に表している様だった。

「携帯電話のブックマークでも特に多かった事が『動物の解体』のページでした。綺麗サッパリ眼を刳り貫く事が出来たのも幾重にも積み重なった下準備のお蔭だったのかも知れませんね」

そう告げると、信じられないとばかりに岡持センパイが首を振る。
だが私は告げるぞ。
これを聞く事は依頼主（クライアント）の責任であり、この事件の被害者を身内に持つ彼が知るべき事の１つであるのだから。

「来島はね、探していたんです。自分が過去に失ってしまった、自分の眼をね」

来島要平。
幼い頃に交通事故で右目を切除。それ以来義眼で過ごしているとの事だったが、本人は自分の眼が無くなったと言う事を理解しては居なかった。
この世界の何処かに自分の眼があると本気で信じていたのだ。
だから眼を持つ者を襲った。

何故眼鏡を持つ者を襲ったのか。
それは――眼鏡を着用していない人数よりも、着用している人物の方が圧倒的に少ないからでは無いだろうか。
来島は理解して居たのだ。
自分が、この世界では弱者である事に。だから自然と少数を相手にする事を選ぶ。
弱者なりの思考。
故に、彼は決して強者にはなりえない。

「ある意味では来島も被害者ですけど……同情の余地はありませんね」

夕陽でオレンジに染まった空を一瞥して、私は席を立つ。
あとは入金。
その後には暫くバラ色の人生が待って居る訳だ。お疲れ様、私。

「……何故、同情の余地が無い」

物置のドアノブへと手を掛けた私を呼び止める声。
この部屋には2人しか居ないのだから、それは必然的に岡持センパ

イになる訳だ。
やけに切羽詰った様な彼の言葉を聞いて、私は――溜息を吐く。
どうして同情の余地が無いって？
考えれば分かる事じゃ無いですか、センパイ。

「弱い奴は与えられた物で満足すりゃ良いんですよ。この世界を回しているのは強者で、弱者に出る幕なんて最初からないんだから。今回の来島の責めるべき所は――自分の中身を見誤ったこと。言うなれば自業自得です」

岡持センパイは驚愕を表に出した様な顔で私を見詰める。
何か可笑しい事でも喋っているか？　これが世界の真理ってヤツじゃないのかね。
まぁ真理の探究なんてしたくも無いけれど。

「だって――来島は弱者だったんだから」

ニコリ。
それだけ告げて、私は部屋を出る。
あとに残された岡持センパイは、その場で頭を抱えていた。

皆さんも、万屋に用事があるならお金と生徒手帳を持っていらして下さいね。

架空眼球（後書き）

意見・感想待ってます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9380s/

殺戮のカタストロフ

2011年10月7日10時57分発行